



立ち読み版

妖狐は悦獄に堕き

小説 新居佑

挿絵 sian

第一話	妖狐転生・クイーン退魔師綾辻藤香	006
第二話	丸呑み・肉体媚薬改造の屈辱	037
第三話	終わりになき産卵絶頂	075
第四話	背徳の妖狐公開屈服	121
第五話	肉欲に堕ちる妖狐	168
最終話	二人のシアワセ	215

## 登場人物紹介

Characters



あやつじとうか  
**綾辻藤香**

退魔師の名家である綾辻家の現当主。巨大な妖魔をも一瞬で滅する、最強の退魔師として人々から頼られている。平安時代に妖魔の頂点に君臨していた、九尾の妖狐の生まれ変わりであり、戦闘時は獣耳と九つの尻尾を露わにする。

むらさとあきたか  
**村里章伯**

千年前、命を賭して藤香を助け、共に転生した当時の綾辻家当主。現世では、御側付き兼恋人として藤香を支える。

ほうげん  
**法限**

かつて藤香に戦いを挑み、敗れ去った邪悪な陰陽師。転生を遂げた後も、多数の妖魔を従えて藤香を執拗につけ狙う。

「ふあぁっ、くう……あ、んんっ」

（ぜ、全身が……頭が蕩ける……うっ。我慢なさい、藤香ぁっ。章伯の前で、こんな奴になんてっ！）

気配から、章伯がまだこの場にいるのははつきりとわかる。だからこその他の男から与えられる快楽になど、絶対に屈するわけにはいかない。

「気持ちはまだ折れていないようだが……身体の方はそうはいかないようだなあ！」

言った男の左手が、剥き身淫核を思い切り抓った。そして膣内に挿入した右手の三本の指をクイツ、きつく折り曲げて桃色の肉ヒダを、きつく擦り上げる。

触手たちも主に応じて、一際強く藤香のあらゆる性感帯を全力で締め上げた。

「そん……！ あ……おおっつ!!」

瞬間、全身で快感が爆ぜた。章伯との愛ある絶頂ではない。好きな男の前で辱められ、無理やり昇り詰めさせられた……どうしようもない屈辱のエクスタシーが、藤香を快楽の園へとね上げる。

これまで敗北を知らない気高い妖狐退魔師の恥辱を加速させるように、喉奥に挿入された触手ペニスに、二度目の催淫液を先ほど以上に体内にぶちまける。

ドビュオオオツツ！ ブビィィィイツツ!!

「ひぐうっ！ あ、あはぁっ!!」

ビクビクンツツ!! と肉壺に吞まれたままの藤香の上半身。そして無様なガニ股姿の下

半身が同時に痙攣し、男たちに妖狐退魔師の淫らな絶頂痙攣を見せつけてしまう。

（く、悔しいっ！ こんな奴らにイカされ……あ、だめっつ。これ以上は……くあぁっつ！）

ブシャツツ！ ビシャアアアツツ!! ジョロロ~~~~ツツ。

ほどよい筋肉に引きしめられた両脚が、ピンっ！ と激しく突っ張る。ごく短いミニスカートの内側で、初々しい牝の花びらがわななき、濃い本気汁だけでなく、緩やかな小水まで床にぶちまけてしまう。

「くく、汁だけでなく小便まで漏らすとは……。よく見ておくんだな、少年」

「そんな……藤香……。くうっ」

男の声に屈辱感が増していき、章伯の言葉に恥ずかしさが募る。それらはいったばかりの背徳的な心を刺激し、新たな快感の種を藤香に植え付ける。

「あ……私、イカされ……章伯……。おおおつ、こんなのが気持ちイイなんてえ……っ」

触手の体内で藤香は、快感のあまり白目を剥いたまま、恥辱絶頂の余韻を強いられるた。

（こんな臭くて、ぶよぶよした気色悪い肉の中で……。黽られ続けるなん、て……くうっ）

再びの体内媚薬注入に、ピッチリした退魔スーツ姿のセクシーボディが、ムワツとした濃い牝フェロモンを噴出しながら、力なくエロティックに痙攣し続ける。

「ふっ、それではそろそろ仕上げといこうかな」

男が新たに呪文を唱えると、赤黒い触手が蠢きます。今まで無様なガニ股姿勢であろう

とも、どうにか踏ん張ってきた藤香の下半身を、容赦なくズブズブと呑み込んでいく。

「くっ、ああっ。やめなさ、とまれ……んんっっ」

感じたことも、想像したこともない被虐絶頂の快感に、ムチリとした麗しい両脚は、小さな抵抗の一つもできずに、ただブルブルと惱ましく震えるだけだった。

ジュルジュルウウツツ……と不快な音を立てながら、肉触手に吞まれていく下半身。その媚肉に、上半身と同じ生温かい肉壁とドロドロした催淫体液がジワジワと接触してくる。「あ、おおっ。ううっ。ふ~~~~ううっっ」

過去、九尾の妖狐として全盛を誇っていたころ、刃向かう他者の肉を喰らうことはあつた。しかし自分が、まさか全身を丸呑みされるなど、考えたこともなかった。

（み、身動きがとれない……っ！ 私が下級妖魔に……くそおおっっ！）

妖刀を振るい、鋭い爪を研ぎ澄ましてきた両腕は、頭上でひとまとめにされ、壁から生える触手できつく拘束されている。

呑み込まれたばかりの両脚は、権勢を誇った最凶の妖狐に、今の無様な立場を叩き込むように、大きく左右へと開かれていた。

藤香が妖狐でなく、章伯と対等の人間であるという証の魅惑的な退魔スーツ。それは粘つく無数の触手たちに無残にはだけさせられ、汗と汁にまみれる女体を淫猥に彩っている。

「あれだけ特濃の媚薬をぶち込んだからな。肉壺の中では、笑えるくらい情けない格好を見せていることだろうよ」

「や、やめる……！ 藤香をその化け物から早く出せっつ!!」

「黙れ、綾辻。いや今は退魔師の下人扱いだったか？ くく、千年経ったというのに、まだバカな奴だ！」

「ぐあっ！ くっ、とう……か……っつ」

肉壺の外で、章伯が傷つきながらも自分を呼ぶ声がある。なんとかしなければいけない。自分は当代最強の退魔師だ。章伯を、愛する人を守らなければ……。

「あき、た……か……っつ!! んおっ!! あ……ああっ!!」

凶悪な妖狐を変えた、恋する気持ちを土足で踏みにじるように、下等な触手たちが藤香の牝の部分責めたてる。

ドチュウウツツ！ ゴリュオオオツツ!!

成人男性の腕ほどもある逞しすぎる触手男根が、つい数時間前に破瓜を体験したばかりの女花の膣道を抉り抜く。

優しさも、焦らすという機微もない、ただ女肉の奥へとねじ込むだけの、野生じみた力任せな触手の突き込みなど、本来気持ちよくもなんともない。

しかし、一般の女性がとつくに廃人になるほどの催淫薬液を注入された女陰唇は、藤香の誇り高い意思など関係なく、下劣な触手ペニスをきつくきつく締め付ける。

「お……ひぐっ！ だ、誰がお前たちなんか……負け……。おぼっ！ そこはちが……んぷううっ!!」

強い覚悟で必死に快楽に抗おうとするが、触手たちはそんな凜々しい妖狐退魔師の口、さらには秘唇の下でヒクつく尻の穴にまで、容赦なく責めを行ってくる。

無数の小さい触手が、元九尾の妖狐を小バカにするように、舌に巻き付いて締め上げる。性的な器官であるなど意識したこともなかった不浄の排泄穴に、人の腕ほどもある極太触手が無理やりねじ込まれる。

排泄物が出ていく方向とは真逆の道筋を突き進んでくる触手肉棒……その表面に無数に付いた突起物が、腸壁をゴリゴリと隙間なく刺激し、颯つてくる。

しかも媚薬改造された尻穴は、藤香の意思通りに異物を押し出すどころか、腰と肉壁を勝手にウネウネと動かして、主人にアブノーマルな変態快楽を教え込んでくる。

「あ、んんっつ！ おおつ、んんっ……ふ、ひいひいっ！」

肉体に裏切られ、触手に犯される快感に、強気の声が、あからさまに野太い牝の声へと変わっていく。たとえ今も昔も無敵を誇る藤香であっても、女であり一匹の牝であることは変えられない。

内に眠る快楽本能は、矜持や愛情よりも、化け物が与える爆発的な官能電流を、高潔な理性へと叩き込んでくる。

（き、気持ちいい……。私が触手なんか……。！ ア、アソコも、お尻も……。くうう、た、耐えてみせるわよ……。んんっ、ふううっ！）

狭く蒸し暑い肉壺の中で拘束されているのは、抵抗どころか、身じろぎ一つできなかった。

低能な触手妖魔たちに、文字通り一方的に、徹底的に腋や耳、乳首、太腿や尻のラインを撫でられ、弄られる。

いつものように圧倒的な妖力をもって反撃したいのに、触手レイプになすすべもなく、媚薬改造されていく自身の女体の疼きに、いやらしい牝声を発することしかできない。

「く、おおっ……頭が蕩けて……っ。んぶっ、じゅじゅるうっ！ 触手ペニスがあっ、やめなさいっ！ 早く抜け……んちゅううっっ!!」

言葉こそ高圧的だが、媚薬漬けと肉壺拘束という、かつてない危機的状况から脱出しなければならぬのに、藤香の背筋をゾクゾクとした初めての快感が駆け昇る。

「あんっ、んぶっ！ あっ、ひうっ……んんんっ!!」

（な、なんなのこの感じ……？ 犯されているのに、気持ち……昂るなんてっ!! 私、おかしく……ううっ）

グチュグチュツツ！ と不気味な触手ペニスが二穴を奥深くまで犯してくる。屈辱で心はいっぱいなのに、身体中が熱くなる。

退魔スーツの内側は蒸れた汗と、触手から際限なくにじみだす催淫液が混ざって、ムワリとした発情臭を鼻孔に突きつける。

肉体的な尊厳である獣耳に、九本の尻尾。それすらも今では藤香を快楽に惑わす、強烈な弱点へと変態改造されてしまっている。

狭い肉壺の中で、たっぷりの媚薬液にとろみがつくくらい漬けられた尻尾が熱い。触手

にネロネロと弄られると、尾てい骨に切なげな肉欲が響き渡り、必死に保とうとする女の矜持を根こそぎグジュグジュに溶かしていく。

最強の妖狐退魔師のプライドが、淫猥な快楽の炎に炙られて、ジワジワと蕩けていく。その恥辱感が、またより深い牝の嬌声と快楽を藤香の心身に刻み込んでいく。

「ほう、好きな男の前で嬲られているのを感じるとは……。たいした変態マゾだな、女狐」  
「マ……マゾ、ですって!?! この綾辻藤香様がそんな変態なわけ……。っ。んひうっ! あっ、ああっ。言うな。くっ、見る、なあっっ!」

章伯に甘えたいという本心を恥ずかしく思うあまり、これまで居丈高な部分しか見せてこなかった。妖魔を退治するときでも、常に余裕をもち、妖魔を圧倒する姿を少年に見せつけることで、側にいるだけで落ち着かない気持ち悟られないようにしてきた。

（こんな情けない格好を章伯に……。法限にまで見せつけている……。それが、気持ち……イイ……? 私はマゾ女、なの……? ん、あああっ!!）

一度脳裏に刻み込まれた「マゾ」と言う言葉が、これまで常に高慢不遜な態度を貫いてきた藤香に、変態的な快楽を覚え込ませていく。

「くく、お前は生まれながらのマゾ女だ、九尾の藤香。お前は人に見られ、嬲られ、犯されることに悦びを感じる、正真正銘のマゾ狐だよ」

触手たちに胸や二穴、果ては耳や腋といった部位を、ゴシユゴシユ、ジュリジュリと舐めるように擦られ、弄られている自分を想像するだけで爆発する不思議な快感。

それが決定的な被虐快感だと教えられ、否定しようとしても、より大きな官能の渦に全身が蕩け墮ちてしまう。

「ち、ちがう……！！ 私はマゾなんかじゃ……お、んあああつ！ 感じ、るうっ!! 触手に丸呑みされて。……章伯に見られてるのに、私……嘘、気持ち……イイイツ!!」

無敵無敗を誇ってきた女退魔師が、決して体感することのなかった被虐的な状況が、藤香自身も知らない恥辱の性癖を暴きだす。

法限の耳障りな声すらも、マゾ的快感を高める成分となってしまう。気持ちよさに溺れてはならないのに、新たな責めを求める心の高鳴りを確かに感じてしまう。

ドチュドチュツツ！ ガクンガクンツ!!

「あつ、ああつ！ やめ……気持ちよくなる……。私、マゾ快感覺えさせられ……っ。やめろやめろ……っ！ 私をここから出しなさい……んぶおおおおっ!!」

膣と尻に挿入された肉ベニスの力任せな直線的な突き込みが一層激しく、そして深くなる。媚薬で炙られ、触手のざらついた表面でズリズリと擦られる膣壁のヒダ一枚一枚が、牝絶頂に導く破滅の性感帯となつて、藤香の絶対的なプライドを破壊していく。

(オマンコ、気持ちイイツ！ おおおっ、お尻が蕩けて……っ。くっ、こんな下衆に……九尾の私が……んちゅ、じゅるううっ!!)

なんとか灯してきた反抗の意思も、触手が二穴を交互にズボズボと出し入れするたびに起こる快感に、繋ぎ止める暇さえなく掻き消えていく。

口や喉の中は、何本もの細い触手に疑似フェラチオを強要され、唾液を呑み込むだけで、軽く絶頂に達してしまう。

「おっ、おっ！ く、るっ!? ダメ、やめなさいっ！ 誰がお前たちなんかの精液を……おっ!!」

愛する章伯の前で、これ以上恥を晒したくないという乙女の心が、余計惨めな快楽への欲求を、囚われの女退魔師へと植え付けていく。

無理やり鋭敏にされた牝の本能が、触手たちの射精衝動を、理性に突きつけてくる。

激しい性欲が最高潮に達している大小の触手妖魔は、ギリギリのところまで耐え抜こうとする藤香の感じる部位を、徹底的に追い込んでいく。

獣耳の内側に浮かび上がった微細な血管を執拗に舐めまわし、ただでさえ敏感に改造された器官を、完全な絶頂性感帯へと調教していく。

ぷるんと、溢れ出た二つの爆乳は、根元からギッチリと締め付けられ。たっぷり詰まった牝脂肪の中を、痺れるような快感がひっきりなしに弾けまわる。

小指大にまで肥大化した乳首、そしてクリトリスは、細い触手できつく引きしめられたのち、まるで男のペニスのようにシコシコギチユギチユと、信じられない速度で何度も何度も扱かれ続ける。

「あ……おっ。やめ、ろおっ。くっ、んあぁっ、あああぁっ!!」

最強退魔師のプライドを守るといった、女としての大切な矜持は消え失せ、ただ絶頂だ

けはするものかと、藤香の美貌が官能と必死に戦い続ける。

瞳をきつく閉じ、全身に力を込める。暑苦しい肉壺の中でブルブルと断続的に震える背筋を伸ばし、冷たい外気に触れる股座をピクピクとエロティックに軋ませる。

「ふふ、無駄だ。さあ、じっくり拝ませてもらおうか。綾辻藤香のイキっぷりをなあ」

「だ、れが……ああっ、そんな……だめっ！ 二穴同時……ひぎいいいっ!!」

これまで交互に責めていた女芯と尻穴が、まったく同じタイミングで触手ペニスにピストンされる。

二穴の感度は一気に二倍以上に膨れ上がり、藤香の肉壁一枚を隔てて、強引に押し広げられる性器と排泄器官が、一突きごとにたまらない快感を藤香の全身に送り込んでくる。

ドチュドチュッ！ という愛液と腸液が肉の剛直と混ざり合う屈辱的な音が響き、まだ経験の浅い狭い膣と腸道が、ゴリュゴリュと無理やり拡張させられ、卑猥な性感帯へと調教されていく。

「くっ、ああっ、ダメ……もう、我慢が……。くるくるっ、すごいくるっ！ あ、あああああっ!!」

そして二穴内の触手、胸や口、腋、臍と媚薬まみれの藤香を齧る無数の触手たちが、示し合わせたように、きつく荒々しく、奥の奥まで藤香の感じる部位を思い切り突き上げ、締め上げる。

同時に、触手先端の口がパツクリと開き、人間の男など比較にならない莫大な妖魔精液

が藤香のいたるところにぶちまけられる。

ドビュンツツツ！ ドバアアアツツ！ プリユウウウツツ！！

「ほっ、おっ……んおほおおおおおおおっ！！」

わずか一瞬だけ、炸裂する快感に、ありったけの誇りを集めて堪えた。しかし触手口から大量の下級妖魔ザーメンと一緒に送られてきた無数の卵が子宮を埋め尽くしたとき、藤香の女のプライドは、まばゆいエクスタシーの光の中に消え失せていった。

「あおおっ、イクツツ！ おひっ、イグイグツツ！ 受精アクメええつつ！ 低級妖魔の産卵受精でイグツ！ 苗床、絶頂……気持ちイイイイイツツ！！」

自分がどれだけ無様な言葉を発しているか、わずかに残る理性ではわかっていた。発する淫語のすべてが法限と章伯の耳に届いていることもわかっていた。そう思うことが余計に身体を気持ちよくさせた。

「おほっ、おおおおおっ！ 触手ザーメン、卵まだクルウ！！ イグツ、ずっとイグウウウツツ！！」

「はははははっつ、ひどい声だ。触手の産卵射精は当分続くぞ。せいぜい至極の快楽を味わうがいい！」

「あっ！ くやし……まだ出る!? ずっとイグウウツツ!! おっほおおおっ！！」

男の高笑いと子宮に感じる触手精液と卵の感触に、圧倒的な敗北感が込み上げてくる。

しかし巨大触手に丸呑みされた藤香は、無様とわかっていながらも、ただ肉壺の中で、



絶頂アへ顔を晒し続けるしかなかった。

「あ……はっ……。お、んんんっ。イク、イクウウ。ん、はああっ」

三十分を超える中出し産卵射精の後、肉壺から吐き出された藤香は、情けなさすぎる完敗の姿を、法限と章伯に見せつけてしまっていた。

うつ伏せに投げ出されたまま、ずっしりと重量感のある桃尻は、無意識に高々と上げられていた。時折二穴からプシュッ！ ピリュウッ！ と濃い触手ザーメンが吐き出され、藤香が受けた中出しの凄まじさを物語る。

ハチミツにでも漬けられたかのような、催淫液と汗、ザーメンに女の本気汁だらけの身体は、艶っぽくてかり、全身からムワッ！ とした牝臭を辺り構わずまき散らしている。

だらしなく垂れた九本の尻尾に耳。無様に白目を剥いたまま、舌をハッハッと獣のように出しっぱなしにしている。

「ふっ、好いた男が見ているというのに、ひどい格好だなあ」

「はあ、はあ……。黙りなさい……。くっ、このくらいで勝った気にならないことね。あなたは私が必ず殺……。して、あげるわ……。っ！」

本来ならば、いまだに続く絶頂の余韻で、ロクに動ける状態ではない。しかし藤香は、大量の白濁と粘液まみれになった身体を、ゆっくりと起こし、法限を睨みつけた。

粘ついたザーメンをかぶった全身は、官能で小刻みに震えているが、鋭さを取り戻した瞳には、はつきりとした男への殺意が宿っている。



眼前で、何百人もの市民たちが見つめる視線が、どうしようもなく直接膣内に突き刺さる。

頭部と両手を枷にはめられ、こんな男にバックで犯されているのに、それを見られてたまらなく恥ずかしいのに、藤香の火照る身体は、さらに疼きを強くしていく。

(ダメえっ。見るんじゃないわよっ！ こんな情けない私の姿なんか、ああ……見られるわ。犯されてる私を見て、みんな興奮してるっ)

脳裏に浮かんだ、恋人を裏切るような考えを、頭を振って消し去ろうとする。しかし、周囲には、藤香の乱れる様を見て欲情した男たちの臭いが、たっぷりと充満している。

「ぐふふっ、あれえ、藤香様？ だんだん腰が、自分から吸い付いてき始めましたよ？ まさか藤香様……」

「ち、違う……わよっ！ んんっ、私はあなたのなんか欲しくない。絶対に欲しがっちゃいけないのに……ほ、おおっ。身体が勝手にいっ」

「ぶふふ、藤香様の尻が合い腰を打ってくれるんで、子宮の入り口にガンガン届きますねえ？ ほらあ、さつきよりずっと感じて……なんてことないですよね？」

ギチュンギチュンツツ!! ズチョンンツツ!!

男の言った通り、藤香は無意識のうちに、肉棒のピストンに合わせて腰を打ちつけていた。パンパンっという牡と牝の腰が合わさる音が、集まった人々の耳に響いていく。

「そ、そんなことないわよっ。あるわけな……んひいっ！ こんなチンポにい、私は屈

したりなんか……ああ、はああつ、ひいううつ！」

藤香の視界が徐々にピンクに霞がかっていく。食いしばってきた唇の両端から、淫らな涎が垂れ落ちていく。

「どうだ、自分が浅ましい妖狐だと認めるか？ そうすればここにいる、何十人という男たち全員が、お前にチンポで罰を与えてくれるぞ、くく」

「はあはあ、ダメよ。欲しくなんかないわ……。誰が自分からチンポなんて、私はもう妖狐じゃないわ！ 正義の女退魔師、綾辻藤香よ！」

「ほう、まだ認めないか。ならばお前の牝の本性を、淫らなマンコに直接聞いてみようか？」  
法限に向け、強い意志を示した直後、藤香の全身でそれは起こった。

「はあはあ、と、藤香様のオマンコの吸い付きが強すぎて……。俺、もう限界ですうつ！」  
「え……。っ!! な……。今は、やめっつ！」

藤香のムッチリとした肉体に、後ろから覆いかぶさっていた小太りの男が、一層興奮した吐息を漏らしながら、腰に力を込める。

グチュンズチュンツツ！ ジュボジュボオオツツ!!  
勢いを増した突き込みは、子宮の入り口を容赦なく叩き、男女の汁でヌラヌラとねとついていた肌から感じられる肉棒の熱が、一気に膨張していく。

邪悪な欲望を滾らせる膣内のペニスが、拘束された藤香の子宮奥へ向けて炸裂する。

ドビュオオオツツツ！ ドチュドチュツツ！ ビュオオオオツツ!!

「ほおおおおつっ！ 中に射精なん……ひぐつつ、んぐううつつ!!」

（あ、熱いいいいっ！ 中出し射精すごおつっ……ダメ、流されちゃ……私のプライドにかけて……んほおおつ!!）

ゴブオオツ！ と、子宮口と直腸に流れ込んだ白濁の快楽だけでなく、豊満な藤香の媚肉すべてに、灼熱の牡マガマがぶちまかれ、注がれる。

藤香はそれらがもたらす破滅的な快楽を耐え凌ごうと、全身に理性と誇りの防壁を張り巡らせる。

「ああ、藤香様のマンコが、必死に堪えてるっ！ でもまだ、射精は終わりませんよおつ！」

ドブドブドボオオオツツ!!

でつぶりとした男の人並み外れた量の妊娠汁が、容赦なく流し込まれる。子宮への射精は高められた性欲を完全に臨界させる。

「ザ、ザーメン多いいっつ！ 人が我慢してるのに、おおおつ！」

（市民ザーメンに頭がグチャグチャにされて、私、もう……っ！）

理性の限界で苦悶する藤香をよそに、全身の性感は、際限なく上昇していく。

その圧倒的な官能の熱量を受けた牝の官能が、藤香の頑なな意志を、無理やり牝の絶頂へと突き上げて、屈辱の絶頂アクメを脳髓のすみずみ……退魔師の誇りを欠片残さずエクスタシーへと貶めていく。

「ふぐつ、んおおつ。んひいうつ、はひ、ふひいいっ！」

藤香はその美しい尊顔を、鼻水と涎で汚しながらも、絶頂に抗った。快楽とプライドとの板挟みでグチャグチャになっていく理性を、必死に守り抜こうとする。

もうすでに派手な中出しアクメを晒しても不思議ではない快感が、全身に満ち満ちている。しかし、屈するわけにはいかなかった。

快楽の前に跪き、淫乱な妖狐だと市民たちの前で宣言すれば、退魔の名門・綾辻の現当主である自分に付き従ってくれた章伯を裏切ることになってしまう。

せつかく元の力を覚醒させた章伯と再会したとき、そんな事実を知られたくない。

「くく、人としての誇りを保とうと、すごい顔だな。しかしお前は、どうあがいても牝なのだよ、九尾の藤香！」

法限はそう言うと、人々にわからぬよう、小指ほどの触手妖魔を召喚した。それを藤香の、すでにきつく勃起し、包皮も剥けたクリトリスへと置き、触手の先端から特濃の媚薬発情液を、藤香の肥大化した快感肉豆へと流し込む。

「なっ、あああつ！ んおほおおおおおおつっつ!!」

文字通り紙一重の状態で、絶頂を堪え、精神の陥落を防いでいた藤香の肉体が、濃縮された魔媚薬の直接注入を受け、完全に暴発する。

(なにこれええっつ！ クリが灼けるっつ！ 頭が、真っ白になるううっつ!!)

瞬間、理性がドロドロに溶解していくのを、藤香は感じた。抵抗などなにもできない。淫核から全身へと一瞬で広がった、圧倒的なまでの快楽奔流に、拘束された身体の芯から、

快樂を求めてしまう。

「イックウウウウウツツ!! んおおおつ、私、ザーメンでいつてるのおおおつ!!」

枷がなければ、背筋が折れ曲がってしまっていたのではないかとさえ思える激しい痙攣絶頂を、藤香は目の前の市民たちに見せつけた。

「んほおつ! 気持ちイイのおおつ! 市民チンポ射精、耐えられないわよおおつ!!」

「そんな、あんな男のチンポで藤香様が……」

人々は、藤香に対する信頼を、淫猥な疑惑の念へと変貌させていく。

「くく、守るべき市民のチンポでイクとはな。どうだ、お前は淫乱な女狐だ。ここにあるチンポが欲しくて欲しくてたまらない、浅ましい牝なのだな!!」

「はあはあ、わ、私は……あつ」

男の言葉を否定しなければと、反射的に思った。

しかし生の肉棒だけでなく、膣内に熱いザーメンまで中出しされ、発情女体が、絶頂しても疼き続けている。牝の淫らな欲求が収まらない。冷静な思考が、キュンキュンとなる子宮の声に侵され、溶かされていく。

見れば、藤香のイった姿を見て興奮した男たち十数人が、我先にと下半身を露わにして、ずらりと藤香を取り囲んでいる。

(私は退魔師……。淫乱な妖狐なんかじゃない。千年経って、やっと章伯と同じ人間に転生できたのよ。それをこんな快樂なんかで……つ)

中出しアクメの余韻が消えてくれない中、まばゆい絶頂の残光の中で、藤香は必死に誇り高い自我を保とうとした。

しかし、牝の本能に陥落した視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚……五感のすべてが牡の猛る肉棒からの感覚に傾けられる。

鼻先に広がる逸物の群れ。その多種多様な形、大きさと、それぞれが先端から濃い牡の臭いを出している光景から、どうしても意識が離せない。

(す、すごい量のチンポ……っ。こ、これだけの数に犯されたら……)

妖狐であった時代も含め、自身の敗北姿すら想像したことなどなかった。しかし今確かに想像したのは、快楽に屈し、ペニスを食べる自分の姿だ。

「はあ、ああ……チンポ、チンポ……おっ。だ、めえ……章伯、私……っ」

一度思い浮かべれば、決して消えることのない淫らな想像に、愛する少年への想いが霞んでいく。

千年前の殺戮と暴虐の日々が、快楽の酒池肉林へと変わるだけのこと。しかしそれを選んでしまうということは、共に現代に転生し添い遂げようとしてくれた少年を、確実に裏切ることになる。

ブシユツツ！ ドロオオオツ。

「お、ほおおっ！ 精子いいっ、あひいいっ」

藤香が愛情と肉欲に悩み抜く中、先ほど中出しされた大量の濃いザーメンが、膣からブ

リユッ！ と噴出される。やまない発情を植え付けられた女脛は、たった一回の中出し絶頂では収まらない。

膣だけではなく、ジンジンと痛む赤い勃起乳首や、いやらしくヒクつく尻穴など、身体中のいたるところが、火照って疼いてたまらない。しかもそれを満たすだけの肉棒が、目の前にあるのだ。

「くく、もしここで自分を妖狐と認めるなら、このチンポはすべてお前のものだ。まあ、それを拒むというなら、私の負けだ。この場はおとなしく退いてやろう」

「見逃すというの……？ ああ、でもチンポもなくなつて。そんな、くううっ！」

肉欲を叩き込まれる前の藤香なら、悩むことすらしなかつただろう。しかし章伯救出のチャンスを得る代わりに、これだけのペニスに輪姦される機会を失つてしまう。全身の牝の疼きを収めることは、もうできない。

単純だが、強欲な二つの選択肢を突きつけられた藤香は、我知らず、獣耳をパタパタと前後に、そして九本の尻尾もふわりふわりと左右に振っていた。

本能は快感にすでに屈服している。そして最強の女退魔師として、決して汚されることのない高潔な魂もまた、背徳の快感の味を知ってしまった。

（私は章伯を愛しているわ……。でも、ああ……チンポに犯される私を想像するとゾクゾクするのよっ。章伯を裏切つて、みんなに見られながら、こんなチンポに屈するなんて……すごい気持ちよさそう……っ！）

千年前、一度命を失いかけた章伯と、現代で再会し、今まで幸せな日々を暮らしてこれた。しかし、そこに今味わわされているような、のめり込むような官能は存在しない。

たった数日前までは、章伯との穏やかだが充実した未来だけを描いてこれた。けれどこの身体の疼きが求める快感を覚えさせられた現在は、とてもそれだけでは満足できない。

（そうよ、解放されても、こう身体が疼いては、章伯を助けには行けないわ。だったら、ああ……恥を覚悟で犯されてすつきり……）

木柩にはめられた藤香の美貌が、肉欲に都合のいい理由を思いつき、ニタァツと恐ろしく淫靡な笑みを浮かべた。

尻尾の横揺れが速くなり、尻がクイクイと淫らに動く。それらは女退魔師がひどく興奮していることを、如実に示していた。

「章伯あ……ごめんさい。私、もう人間じゃなくていい。淫らな牝妖狐でいいのおつ！だから、だから早くチンポちようだい！チンポチンポっつ！この最低の変態女狐にあなたたちのチンポをぶち込んでちようだいよおっ!!」

瞬間、藤香のプライドが粉々に砕け散る音よりも、はるかに巨大で濃厚な、愛する人を裏切ったという快感が全身を駆け抜けた。

それは愛情の裏切りという許されない後悔を、正当化するに十二分な快感電流となって、藤香の精神そのものに、牝の悦楽を叩き込む。

「ああっ、憧れの藤香様に、俺のチンポをぶち込める日がくるなんて！」

「藤香様が狐でも退魔師でもどつちでもいい。こんなエロい女、思う存分犯してやるぜ！」  
男たちは、木枠に固定された藤香に、一斉に取りつくくと、各々の肉棒を、欲望のまま押し付けてきた。

ドブチュオオオツツ！ ドチュブチュツ！

「んほおおおつつ！ きたあつつ、チンポいっぱいきたのおつ！！ 気持ちイイわあ、牝狐・藤香、市民たちのチンポでイイイッグウウウツツ！！」

十数本ものペニスは、さまざまな性感帯に挿入し、押し付けられた。

尻穴はもとより、拘束されたせいで、巨木に実った熟れた果実の様を連想させる爆乳や、腋や臍。長い髪にいたるまで、男たちの牡欲で満たされていく。

「あん、あはあんつ！ アナルもお、ケツ穴もほおつ！！ 最高よおつ、セックス最高つ、ド淫乱の女狐、まらイグウウウツツ！！」

ドッグスタイルで拘束された、溢れんばかりの肉感ボディに、ねっとりとした牡の先走り汁がまるでローションのように塗りとくられる。

発情した汗と牡汁が、グラマラスなボディラインをヌルヌルと伝い落ちていく。降り注ぐ日差しに照らされた藤香の裸体が、淫猥にテカテカと光り、妖艶な牝オブジェと化していく。

（イグウイクウツツ！！ 章伯、ごめんなさいつ。私、見られながらの敗北輪姦チンポが、こんなにイイなんて知らなかったのよおつ！！）

藤香は、絶頂するたびに、心で章伯に詫びた。それが被虐アクメの快感を膨れ上がらせると知ってしまった。

愛する男に謝罪しながら、その顔は完全に蕩けきった恍惚を浮かべ、性欲に目覚めた牝そのものといった乱れ方で、快楽を貪り続ける。

「おおっ、こいつは完全に女狐だぜ。よくも今まで俺たちの前で女王面してやがったな。おらあっ！」

「人の心を弄びやがって。チンポが欲しいんだろ!! 足腰立たなくなるまでイカせまくってやる!!」

言った男たちは強烈な突き込みとともに、藤香の膣や尻穴など全身に向けて、己の欲望を白濁とともにぶちまけた。

ドビュドビュウウツツ! ドブオオオオツツ!!

「おっひいっつ! んふおおおおっ!! イグイグウウツ! も、申し訳ありませんでしたあつ! み、皆様を騙した罰をもつとおっ。ザーメンをくださいいっ!」

章伯への裏切りと同様に、最強を誇り続けてきた自らを貶めることが、たまらないことを、法限の姦計によって、骨の髄まで覚え込まされてしまった。

「んじゆるうっ! ジュブジュブっ! んれろおおっ。んほおおっ、チンポの味最高っ。ほら、チンポ出しなさいっ。抜いてあげるわ。しゃぶってあげるわよほんっ!!」

木杵に拘束されたまま、藤香は男たちの肉棒に両手と唇で貪りついていた。

氣位の高い言葉を吐くことしか知らなかった、形のよい唇を大きく広げ、皮の剥けた逸物を喉奥いっぱいまで啜え込む。

「じゅぶんっ、んふうっ！ おおっ、ちゅぶちゅぶっつ、ごきゅんんっつ！」

美貌を完全に崩したひよつとこフェラを、恥ずかしがるそぶりも見せずに披露する。

「おおおっ！ ひぐう！ 市民チンポしゃぶるだけで、んじゅるう……んぶおおおっつ！！」

触手や狒々たちに犯されたときに、快感の中に嫌悪感を抱いたときとはまったく違う。

一切理性で抑制することなく、快感を欲するままに腰を振り、プライドの欠片もなく謝り、犯してくれと懇願し続ける。

「お、オチンポたまんない……あひっ、ひあ……んひいっ」

藤香の公開輪姦が終了したのは、最初の一人から、ゆうに三時間以上経った後だった。すでに陽は落ちかける中、大量のザーメンにまみれた藤香はうわごとのように快感を咬きながら、ひどいアクメ顔を晒していた。

獣のように鋭い瞳は、快感で完全に白目を剥き、グラマーな肢体のラインはこびりついた古い精液と垂れ落ちる新しい精液。そして自ら噴出した牝蜜によって、艶めかしく彩られている。

キュッと引き絞られていたウエストは、何十回、何リットル中出しされたかわからない牡ザーメンによって、まるで妊婦のように大きく膨れ上がっている。



この画面が切り替わると、藤香が章伯に宛てたメッセージがある。それはきつと、まだ藤香が自分を必要とするものであるはずだ。

暗がりのモニターに、サイトの映像が浮かび上がる。

しかしその視線の先に現れたサイトの実態に、章伯は胸の奥が擦り潰れそうな感傷を、喉の内側から絞り出した。

「な……なんだよ。これ……は……っ!?」

瞳に映るその映像に、章伯の脳裏が硬直する。

【D A E M O N V I D E O S】

その名前に、章伯は聞き覚えがあった。退魔師たちの間で話題になっていた、人の社会に溶け込んだ妖魔が元締め of 非合法アングラサイトだ。

千年もの昔から、人の世に仇なす妖魔にも、知性のある者は存在する。しかし彼らの本質である暴力や性欲が変化するわけではない。

このサイトは、そんな妖魔たちに人外なやり口で犯され、快楽に狂わされていく女性たちの悲嘆、反抗、そしてその末路が、何千、何万と無数にアップロードされている。

妖魔たちが仲間内で、互いの黒い欲望を楽しむためのものだ。

退魔師たちもどうかして、このサイトと、その動画を供給している組織を撲滅しようと活動しているのだが、入り込みすぎた女退魔師たちの痴態がアップされる事態も少なくなく、解決の糸口は見つかっていないという。

そんな危険で妖しいものに……。

「あ、ああ……………」

章伯は再び呻いた。

サイトのトップページいっぱい、美しく気高い、うら若き女性たちが犯されている動画がちりばめられている。

そんないくつもの動画の視聴数ランキング。その中の堂々一位に輝いている動画。モザイクもかけられていないサムネイルに映る、その女性の艶やかな表情――。

その淫靡な視線と瞳が合った瞬間、章伯はただ嗚咽を漏らすことしかできなかった。

頭の中の記憶と、目の前の現実を何度も何度も照らし合わせ、それが嘘である証拠を見つけ出そうとする。

しかしダメだった。どうやつても覆せなかった。

その動画に付けられたタイトルは【九尾の変態牝狐】――。

関連タグには【調教】【レイプ】【正義の女退魔師】【陥落】【チンポには勝てない】などが連なっている。

「そん、な……嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だあつっ！」

いくら叫んでも、モニターの中の彼女が、『ばかねえっ』と優しく罵ってくれることはない。

いつも際どい衣装を着て、小悪魔的に男心をからかっていたグラマラスな肢体は、恥ず

かしげもなく露わにされ、肌を火照らせ、ジワリと発情汗を浮かばせている。

章伯の頭を乗せて、膝枕してくれたふくよかな太腿は、世界中の下卑た、見も知らぬ男たちに向けて大きくガニ股に開かれている。

章伯の童貞ペニスに可憐な処女を捧げてくれた妖しい女華は、下着もなにも着けず、粘ついた熱い本気蜜を、ねっとり床に垂らしている。

高飛車ながら古風で奥手な部分も併せ持つ性格を、よく表した凛とした美貌は、男たちに媚びるような、情けなくもエロティックなものに蕩け堕ちている。

他人の空似や、タチの悪いコスプレだと思いたかった。

しかし章伯は見てしまった。

彼女とおぼしき女性の股間部分。まるで子供の小指ほどにまで勃起してしまった皮剥けクリトリスには、確かな妖力をまとった指輪がギチギチにはめられている。

それは章伯が渡そうとした結婚指輪のなれの果てであり、悪の陰陽師・法限が彼女に刻み込んだ、淫らな性奴隷妻の誓約の証だ。

つまりモニターに映る彼女は本物の――。

「藤香……っ。そんな……これが、藤香……。僕の……僕の藤香がああああつつつ!!」

章伯は慟哭しながら、震える指で、動画の再生ボタンをクリックした。

『うふふ、どうかしらあ？ あなたが一度見捨てた女の、発情オマンコのに・お・い？』

ねえ、退魔師の偉い人？ ふふふ』

『なっ、なぜ貴様が私を!! や、約束が違うではないかっ!! くっ、畜生の分際でえ……』  
モニターに映されたのは、藤香が、男と淫猥な行為に及んでいる姿を撮影した、いわゆるハメ撮り動画だ。

そしてそこには、章伯の知らない、淫靡でサディスティックな香りを振りまく、一匹の牝狐の姿があった。

『うふふ、本当おめでたい頭してるわねえ？ 私の愛しい法限様の目的は、殺生石の力を使って妖魔たちの頂点に君臨し、人間たちを駆逐すること。あなたのような豚を取り立てるなんて約束、守るわけないじゃない?』

二十四インチの箱の中に映る藤香は、少年のすぐ側に寄り添ってくれていたときよりも、さらに妖艶な肉体へと変わってしまった。

ふっさりとした獣耳と九本の尻尾を露わにした、九尾の妖狐姿の藤香。そんな彼女が着こなしているのは、そのグラマラスな肢体を強調するかのような、ピッチリとした退魔スーツを、さらに露出アップさせた破廉恥極まりない淫乱スーツだ。

そのスーツに隠されない部分——数か月前まで、雪のように白く透き通っていた肌は、紫がかつた青色になっており、モニター越しからも、ムンツとした魅惑的な妖気を全身にまとっていることが、はっきりとわかる。

彼女の傍らの床には、男の邸宅を守っていた腕利きの退魔師たちを惨殺してきたのだろ

う、大量の血にまみれた藤香の愛刀が不気味に突き刺さっている。

しかし、そんな肌寒くなるような光景が気にもならないほどに、画面内の藤香はたまたなくエロティックだった。

その証拠に、最凶の妖狐を前にして恐怖に怯えきっている男のペニスには、いかなる高級娼婦のトロトロに濡れた痴穴を前にするよりも、固く強くいきり立つている。

『そんな……。私はあの男に忠誠を誓ったというのに……っ』

藤香が肉ピラを見せつけている男は、日本の退魔師を束ねる、最も役職の高い人物だ。

そんな重要な立場でありながら、殺生石の圧倒的な力を見せつけた法限の脅しに、我が身かわいさになびき、綾辻の屋敷の結界を解いて、体力の回復に努めていた藤香と自分を差し出した張本人でもある。

章伯との仲を引き裂き、自らを快楽の虜に転落させた裏切り者。青い妖魔の肌へと変化した藤香が、少しでも章伯への想いをもっていれば、許しがたい男のはずだった。

『ふふふ、年の割にしつかりとしたチンポね。法限様には、ただ殺してこいって言われたただけけど……。雑魚の退魔師たちを相手にして、今の私、興奮しちゃってるのよねえ？』

『なっ、貴様なにを……。うお、おとおおっ！』

しかし藤香は、情けなく床に尻もちをつけている男への恨みや怒りを発散させるどころか、青白い掌に付いた返り血を、サディスティックな笑みで、ペロリと舐めてみせた。

そして、ムチリとした両脚を、恥じることなく自らM字に開き、猛りきった男のペニス

の先端へと、グラマラスな下半身を、ジワジワと下ろしていく。

その姿に、大切な恋人との生活を壊されたという、負の感情は見受けられない。ただうかがえるのは、藤香が昂る牝欲に従うまま、カメラの前で男を逆レイプすることに、至上の悦びを感じているという事実だけだ。

あれほどまでに憎んでいた陰陽師を、『法限様』と愛おしく呼び、肌も青く染まりきった藤香は、身も心も完全に妖魔へと墮ちきってしまった。

それは千年前の、誰にも染められず、孤高を貫く気高き妖狐に、『戻った』のではない。極上の快樂を与えてくれるご主人様——昔の章伯の苗字である、綾辻の名をも渡してしまった悪の陰陽師・法限の性奴隷妻として、彼女は再び生まれ変わってしまった。章伯の手を完全に離れて——。

『はあはあ、チンポおつ。法限様のモノには全然及ばないけれど、とにかくチンポよお♪  
うふふ、ふふふっ』

藤香の美貌が、自らを裏切った男のペニスを前にして、妖しい笑みを湛えていく。

その微笑に呼応するように、大きく開かれたムチムチの両脚の付け根では、淫靡な女華が、甘い蜜を湛えて、艶やかに咲き誇っている。

我慢しきれないとばかりに、陰唇の内側から溢れた女蜜のしずくが、太腿を伝う濃い汗とともに、トロ〜リと雁首に向けて垂れ落ちていく。

その場になくとも容易に想像できる、肉花弁から漂うムワリとした、牝狐の発情臭に、

男のペニスがビクンビクンツツと、血管を浮き立てて、激しく反応する。

『う、ああっ。くるな……っ。私が悪かった！ 九尾の妖狐……いや、綾辻藤香殿っ！世を乱す悪の陰陽師・法限を倒してくれ！ そうすれば私なんでも欲しいものを……っ』  
『バカねえ。今の私が欲しいものは、お前のその醜いチンポに決まってるじゃない♪ うふふ、いただきま〜すっ』

妖しくも、背筋の凍るような笑みを浮かべ、藤香がポリュームのある腰を、男の逸物に向けて、思い切りズンツツ！ と下ろした。

又チヨツ……ズブブウツ……。

身体を許し合った女性の肉唇に、彼女の意志で、別の男の逸物が挿入されていく生々しい音を、カメラが余さず拾い、モニターの前で情けなく座る章伯の耳に否応なく染み入ってくる。

『お、おとおおっ……っ?! なんだ、このマンコは!! わ、私のチンポが……絞り、とられるうっ!』

藤香が腰を下ろして、勃起肉棒をその艶やかな妖花で丸呑みにした瞬間、齢五十を超えようかという豚のような男が、恐怖ではない快感の呻き声を漏らした。

当然のことだ。藤香としか繋がったことのない章伯にも、彼女の肉壺が極上の締めまり具合をもっていることは、はっきりとわかっていた。

尽きることのない発情愛液でヌメヌメとした女穴の中では、膣壁が休むことなくビクビ



クと蠢動している。

しかもその締め付けは本来女性が絶頂に達する間際に行われる激しいもので、藤香の女穴に一度でも食いつかれれば、敏感な剥き出しの陰茎を、常時きつく激しく締め続けられることになる。

さらに子宮口の奥には、びっしりと細かい粒粒が生えそろっていて、適度にザラついたヒダの感触は、膣道によつて締め上げられた男根の先端をゴリリツと刺激する。

もはや普通の女性の性器では満足できないほどの快感を、牡棒にもたらしてくるのだ。

『どう？ 私の淫乱マンコの感触は？ うふふ、法限様の性奴隷妻にさせてもらつてから、毎日、妖魔の特濃媚薬精子を中出ししていただいているのよ？ だからあ、チンポがないと私もう狂っちゃいそうなの。たまらない、チンポおいしいっ！』

藤香は、はあはあと熱い吐息を漏らしながら、我慢しきれない様子で、男の膨れた腹を見つめながら、自ら腰を上下させ始める。

ズチュンツツ！ ジュブンンツツ！

『おつ、おとおつつ！ くつ、あああつ！』

男が肉棒からもたらされる、あまりに強い官能の響きに、苦悶に満ちた声で応えると、藤香はうれしそうにゾクゾクと背筋をわななかせ、うっとりとした表情を浮かべる。

『いい声ねえ。気持ちがいいの？ 妖狐のマンコでチンポをズボズボされて、退魔師のトツプがヒイヒイ言わせちゃつて……。ああ、たまらないわあつ』

藤香は男のでっぷりとした腹に両手をつけて、さらに腰の動きを速めていく。ヌポツヌポツ！ という淫靡なリズムが、ジユボジユポツツ！ とテンポを上げ、それに従って、男の表情が快感に引きつっていく。

さらに藤香は自らの九本の尻尾の一つを、しゅるりと男の首筋に巻き付けると、ギチギチとその首を楽しそうに締め上げていく。

『う……ぐうっ……。ああ……藤香殿っ。なにを……おっ!!』

『そんなの決まってるじゃない。お前が苦しむのを見るのが私の快感なのよ？ それに誰が助けてあげるなんて言ったかしら？ 法限様の命令は絶対なのよ。お前が射精すると同時に、その首をへし折ってあげる。ああ、考えただけでマンコきつくなっちゃうわあ♪』

『なっ、そんな……おぐううっ』

すっかり藤香に媚びへつらうようになった男に向けて、九尾の妖狐は戦慄の言葉を、嗜虐的な快感に蕩けそうな顔で、平然と告げた。

真綿で締めるように、男の首にジワリジワリと圧力をかけていく。同時に、ペニスを呑み込んだ陰唇と腰の動きに緩急をつけて、男が簡単に射精しないように……苦悩と快楽の狭間で最大限悶え抜く様を楽しめるように弄ぶ。

章伯を悦ばせようと、肉棒の感じる部位をしっかりと掴んで、雁首や陰莖、玉袋にいたるまで思いやりを注いでくれた藤香のセックスは、今や完全に自らの歪んだ快楽を貪るだけのものになってしまっていた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

